公開セミネール記録

「セミネール断章」

『治療技法論』

2012年3月

講義：藤田博史（精神分析医）

セミネール断章　2012年3月24日講義より

目次へもどる

第3講：「フロイトの治療技法とラカンの治療技法の相違点」

講義の流れ～第3回講義の内容の流れを項目に分けて箇条書きにしました。今回、「セミネール断章」で取り上げているのは、水色の部分です～

フロイトとラカン→フロイトの精神分析技法→視覚映像としての自由連想と自由話法としての自由連想→ファンタスムの式→象徴界 →精神病、倒錯、自閉症→人間は人間を騙す→**言葉と嘘→共犯関係→騙されないこと→騙されない人は彷徨う→精神分析の基本姿勢→事後性**→フロイトとラカンの治療法→認知行動療法→了解について→**転移の操作→転移→愛の対象→SSS→SSSのポジション→愛の位置**→不気味なもの→分析家のポジション→無化→ あなたについて話している」ということ→雇われ運転手としての自我→眼差しと精神分析→嘘をつくにも真理が必要→告白と精神分析→自我と無意識→徹底操作→除反応→精神病と転移→分裂病における転移の操作の可能性→DVと共犯関係→被害者と加害者→精神病と享楽→性倒錯と強迫神経症→摂食障害→他者の享楽

フロイトとラカン

　今年はラカンの治療論の話をしていますが、精神分析、ラカン、などというと、必ず「精神分析？偏った古い考え方の一つじゃないですか」とか「ラカン？難しいことばかり言って結局臨床には役に立たないですよね」などと口にする人が出てきます。なかには、すでに何かいわゆる流行のなかで下火になっているような、そういうイメージを持っている方もいるようです。まるで戦後民主主義の教育を受けて育った人たちのように、知らないうちに、精神分析の価値を貶める方向へと洗脳されているのです。これを端的に表現するなら「精神分析に対する無意識的な抵抗」です。人は弱点を突かれそうになると防衛しなければなりません。今回のテーマは「フロイトの治療技法とラカンの治療技法の相違点」ですが、自分で掲げておいていうのも何ですが、こういう問いの建て方自体、あまりよくないのです。ご存じのように、ラカン自身は「フロイトへの回帰」を唱えて、自らはフロイディアンであると宣言しています。つまり、ラカン自身は原則としてフロイトの技法を踏襲しているわけですけれども、そのままではなく、そこには明らかな知の組み換えがあります。

フロイトの精神分析技法

　皆さんはフロイトの精神分析技法について、一番基本的なものは何だ思われますか？

聴講者　自由連想法。

　そうですね。最初はパリのサルペトリエール病院で催眠療法の権威であったシャルコーの授業を受けた時、1885年か86年頃だと思いますが、シャルコーが女性の患者さんに催眠術をかけて、症例提示をしたわけです。それにいたく感動して「これは人の心のなかの見えざる部分を探る一つの方法論として使えるのではないか」と考え、ウィーンに戻って開業し、催眠療法を自らの治療実践のなかに取り入れようとしました。フロイトという人は大学に残って学

問をやるタイプでなく、ユダヤ人だった等々の諸事情もあって、すぐに開業して、いわば手探りで治療をはじめるわけです。そして最初に試みたのがシャルコーから学んだ催眠療法だったのです。ところがこの催眠療法は、かかる人もいればそうでない人もいるといった具合で、かなりばらつきの多い治療法でした。確かに催眠状態にすぐに入る人というのは、治療者がその人に対して支配的な場所に立つことができる。言い換えれば、無意識のなかに直接、治療者の意図を介入させることができるわけです。しかしながら、それが果たして治療なのか、ということについては大いに疑問が残りました。フロイトは試行錯誤をした挙げ句、潔く催眠療法を捨て、治療技法を自由連想法へとシフトさせていったのです。

視覚映像としての自由連想と自由話法としての自由連想

「自由連想法」というのは「心に浮かんだことを包み隠さず話す」という治療契約関係の下に行なう治療技法です。自由連想法と簡単に言っても、実は、思い浮かんだことを連想で話すというのは、幾つかのパターンがあります。一つは、たとえば視覚映像としてなにか過去の出来事だとか、あるいは新しいことでもいいですけれども、心のなかに浮かんだ時に、その心的な視覚映像を報告する形で言葉にするという形があります。つまり視覚映像を見ながらそれを言葉で描写してゆくというやりかたです。実は、ここにはすでに視覚映像を言葉に変換するという一つの恣意的な作業が入りこんでいることに注意しておかなければなりません。もう一つは、意識に浮かんできた言葉そのものを話してゆくやり方です。これは自由連想というより自由話法といった方が近いかも知れません。このように自由連想には視覚映像の報告という形と、浮かんできた語りそのものという二通りの方法があります。自由連想を始めた時は、大体心に浮かんだことの「自我による報告」という形を取ることが多いようです。「そういえばこういうのが見えてきました」とか「ああ、思い返してみたら、あの頃の幼稚園のドアはこうでした」とか。そのうちに分析が進んでくると、問わずがたりというか、一人語りというか、視覚映像とは全く無関係に言葉だけが次々と繋がって出てくる。当初の視覚映像を報告する形でなされる自由連想には、何らかの形で防衛や抵抗が生じたり、無関係なものが割り込んで来たりすることが多いようです。あるいは、視覚映像自体が自由連想の妨げになるような形で浮かんでくるという場合もあります。ですからわたしの場合は、分析主体が自由連想をおこなっている間、その連想が視覚映像の報告という形で行われれているのか、あるいは言語が言語を引きずりだすような形で行われているのか、ということに注意を払います。

言葉と嘘

人間が意識してついている嘘は、全発言の1％以下でしょうね。残りの99％は、自分がそれと気付くことなくついている嘘。もっとラディカルな言い方をすると、言葉で表現されたものはすべて嘘。言葉は虚構であり、偽物です。「梅干し」と言うと口の中が酸っぱくなったりする。しかしながら「umeboshi」というのは何よりもまず音素の集合であるし、実物とは無関係であるし、このように言葉というのは、まずそれ自体が虚構つまり嘘の集合なのです。わたしたちは言葉に騙され続けている。この単純ではあるがラディカルな事実を治療者が常に意識しているかということが重要です。心を病んでいる人たちに立ち向かっている臨床心理士、精神科医、看護師たちは真面目に仕事をしています。と同時に、真面目であるがゆえに、言葉に騙されてしまっている。言葉を信じなければ成り立たない世界に、否応なく住まわされている。言葉になったものは真実であるという暗黙の前提がある。患者が「声が聞こえる」と表明すれば「声が聞こえるんだ」と信じてしまう。真面目であるがゆえに騙されてしまうという不条理な世界。それがわたしたちの住まう言語で構成された世界の基本原則になっている。だから、いったん騙されてしまった者は騙された者同士で、もうこの世界の虚構性に気付かなくなる。

共犯関係

これは、いわば言葉を話す人間同士の共犯関係です。治療の現場で言えば「医者ー患者共犯関係」です。互いに言葉の世界に欺かれて、患者はいつまで経っても治らないのです。治らないからいつまでも通ってくる。いつまでも通ってくるから薬を処方し続ける。診察し、薬を処方するからお金が入る。お金が入るから生きていける。精神科医という職業は、患者が治らないことによって自分が生き延びることができるような（笑）、きわめて逆説的な仕事なのです。精神科という専門科が繁盛するためには心を病んでいる人が相当数いなければならない。これ自体が一つの病いです。

騙されないこと

したがって治療者は騙されないこと。これが一番の心構えになるわけです。フロイトは実際に口には出さなかったけれども、患者に欺かれることは殆どなかった。患者の陳述に対して、その陳述を字義通りに受け取ることはなかった。患者がどうのこうの言っても、それは幻想のなかで増幅されたり、改変されたり、置き換えられたりしている可能性について常に注意を払っていた。ですから「ラカンは臨床に使えない」などと嘯いている人は、その人自身が既に「言葉に騙されている」ことになるのです。つまり、問題はすでに「使える」とか「使えない」とかいうレベルの話ではないのです。そのような人たちは「ラカンは臨床に使えないという自分の思い込みに騙されている人たち」なのです。ソーカルなどという架空の人物が書いた架空の物語に騙されている人たちがどんなに多いことか。あの本自

体が「騙し」であることを見抜けないでいる。

騙されない人は彷徨う

そうすると「騙されない」というスタンスに立つ人は、何か真実なのか、何を信じてよいのか、このことを明言することが困難になります。むしろ、騙されないために彷徨い続けることこそが取るべき唯一の道ということになります。その昔、フォーク・クルセイダーズというフォークグループがいました。彼らの歌に「青年は荒野をめざす」という歌があります。「青年は真実を求めよ、恋人や故郷に別れを告げて、荒野を目指して一人旅立つのだ」というのがこの歌の主旨です。今でも時々、一人で世界を旅している若者たちがいますね。特にアジア、インドやネパールをあてどもなく旅している若者がいます。表向きの理由は「自分探し」や「真実探し」で、自分にとって何か最終的なものを探しているようにも見えます。確かに、騙されない人は彷徨わざるを得ない。ちなみに、フランス語では「騙されない人々」というのは、non-dupes と言います。「彷徨う」という動詞は errer。つまり、Les non-dupes errent 「騙されない人々は彷徨う」。この文章を耳で聞くと「父の名」Les Noms-du-Père と同じ音になります。つまり「騙されない人々は彷徨う」という表現の背景には、騙されないために必要なものは、Nom-du-Père ですよ、「父の名」ですよ、という暗示があるのです。「父の名」とは、シニフィアンの連鎖の中でいうと一番目のシニフィアン S1です（図）。これはファルスと同じものですね。

精神分析の基本姿勢

ですから精神分析の一番の基本姿勢は何かと問われたなら、わたしは「騙されないこと」であると答えます。患者にだけではなく、自分自身にも騙されないこと。自身に対して徹底的に客観的なポジションを取ること。これが精神分析家にとっての第一の心得になります。患者は基本的に自分が「何を」話しているかについては自覚していても「何について」話しているのかは無自覚です。自らの欲望に気付かずに、様々なことを陳述します。たとえば、最初は作り話だったものが、何度も語っているうちに、自分でもそれが真実だと思い込んでしまう、というのはよく見かける現象で、語るたびに話が事後的に変化してくるわけです。

図

$ — -ϕ — S_1 — S_2 — a

$ — -ϕ — Φ — A — a

事後性

そのような事後的な変化は、語りだけではなくて、人間の記憶にも当てはまります。たとえば幼い頃に体験した記憶「道を歩いていたら自分の右肩に小さな蠅がとまりました」が、5年後に思い出した時に「いや、あれは蠅ではなくて、アブだった。僕の右肩にはアブがとまっていた。しかもそれは大きなアブだった」と改変されてしまう。次にそれを友人に話す段になってさらに改変される。「いやあ、道を歩いていたらね、肩にアブラゼミがとまったんだよ。なんかすごくてジージー、ミンミン鳴いていてね、とても恐かった」。更に時間が経つと「いやあ、道を歩いていたら、セスナが肩に止まるようにぶつかってきたんだよ」（笑）みたいになってしまう。このように、人の記憶というのは後から次々と改変されてゆく。このように、翻って記憶に一定の解釈や意味を与えるような特質を、フロイトはNachträglichkeit 「事後性」と呼んでいます。わたしたちの心に見られる重要な働きの一つです。つまり、わたしたちの記憶は常に「今ここ」の地点から遡って想起されているわけです。

転移の操作

ここで行なうテクニックは「転移を操作する技法」です。さきほどフロイトの治療技法の一番は「自由連想」と言いましたが、何よりもまず、信頼できない医師のもとで心のなかを告白することは不可能です。心のなかを告白するためには、治療者に対する深い信頼が不可欠であり、ここが重要なポイントです。信頼を得ることこそが最も重要で、この信頼を瞬時に作り出すための精神分析的な技法があります。つまり転移を操作するのです。

転移

「転移」は 英語で transference と言います。ドイツ語では Übentragung、フランス語では transfert です。「転移」とはそもそも何でしょうか。精神分析を学び始めた人は誤解しやすいのですが「気持や感情を相手に移してしまうこと」だと思い込んでいる人が意外に多いのです。たとえば「あなたのことが好きです」と言ったら、相手に自分の感情を移しており、これが「転移」と思っている人が少なからずいます。しかし、転移というものはそういうものではありません。「転移」とは、発達のごく初期に自分が深い愛情を抱いた対象との関係を、現前の対象との間で再現し反復することをいいます。つまり転移の本質は、発達の初期に生じた対象関係を、後になって別の対象を選択して反復することなのです。

愛の対象

ですから、患者は転移によって、過去の愛情関係を現在の対象との関係性のなかに持ち込むのです。ですから誤解を恐れずに言ってしまえば、人間の恋愛はほとんど全てが「転移」で成り立っているのです。一人では生きてゆけな

い、いわば寄る辺のない乳幼児には、必ず救いの手を差し伸べてくれた愛の対象がいるのです。一般にそれは母の場所です。もちろんそれが父であったり、姉妹や兄弟だったりすることもあるでしょう。誰もが持っているそのような根源的な愛情関係を、治療関係のなかで再現させること、そしてその転移操作の技法に必要なものこそが、SSSという、ラカンが提唱した概念です。

SSS

SSS、最初の S はSujet です。二番目は Supposé、三番目は Savoir 。Sujet は「主体」です。でも Sujet と聞いた時に、単に主人公としての「主体」だけを連想してしまっては片手落ちです。Sujet には「奴隷」という意味もあるのです。「服従するもの」という意味がある。Supposé、これは「想定する」という動詞の過去分詞で「想定された」となります。Savoir は「知っている」という動詞です。これを名詞としてみれば「知」になります。つまり頭で理解して知っている「知識」に相当します。 Sujet Supposé Savoir、日本語に翻訳するときは「知っていると想定された主体」とか「知と想定された主体」とか訳します。ときどき「知の想定主体」とか「想定的知の主体」というふうに訳している人を見かけますが、どちらもフランス語を参照しない読者には誤解を与えそうです。SSSとは、その中身は「Le sujet qui est supposé savoir」ということなのですから「知っていると想定された主体」というのが最も適切な訳語といえるでしょう。

SSSのポジション

このSSSのポジションこそが、分析家のポジションに相当します。分析家がこのSSSのポジションにいる限り、患者の心のなかには「この人は何でも知っている」という感情が芽生えます。ただし、この時の「何でも知っている」というのは、荒俣宏さんみたいに何でも知っている、というのではありません（笑）。「わたしについて全て知っている」ということなのです。つまりこの人はわたしのことをお見通しなんだ。ですから博学であるということを意味するわけではありません。知識が豊富なことと、知っていると想定されることは、二つの異なる事柄です。分析家にとって必要な要件とは、SSSのポジションに立っていること、です。そして、このポジションこそが、小文字のa、objet petit a 、言い換えるなら amour の頭文字のa、すなわち患者にとっての愛の対象のポジションに他なりません。

愛の位置

ビートルズに「All you need is love」という歌がありますね。「愛こそはすべて」と訳されていますが、厳密に言えばこの訳は正確ではありません。「あなた」と「必要としている」という言葉が省略されています。野暮ったい訳になるかもしれませんが「あなたが必要としているすべては愛」つまり「あなたに必要なものは愛だけなんだ」ということです。意味の深い歌です。逆に言えば「愛さえあれば生きてゆける」のです。この愛の位置こそがさきほど述べたSSSつまり分析家のポジションに他なりません。分析家がいて、愛がそこにあって、そして患者は生きてゆける。こうして精神分析家は SSS のポジションつまり愛の位置から声と眼差しを投げかける訳ですが、これはもともと母のポジションなのです。ある意味、乳幼児にとって母の場所は自分を支えてくれる万能な場所なのです。そして、これも人間にとっての幸せと不幸の始まりなのですが、母はいずれ棄却される。いつまでも母と一体化していることはできない。母の代わりになるものを見出さなければならない。母というのは、悲しいかな、棄却されるべき存在なのです。ですから、ラカンは、このobjet petit a を、déchet（くず） とか、rebut（かす） と言い換えたりします。愛の対象であると同時に取るに足らないつまらないもの、そういう位置に分析家は立っている訳です。

PAGE TOP
目次へもどる

==========
精神分析医　藤田博史による
公開セミネールの予告と記録
SEMINAIRE OUVERT PERMANENT
avril 2012
『セミネール通信』Webマガジン版
2012年4月発行　「セミネール通信　復刊第4号　2012年4月号」
発行 ユーロクリニーク文化部　EUROCLINIQUE Division Culturelle
編集 ユーロクリニーク文化部　榊山裕子
Tel:042-308-7637　E-mail: ys@euroclinique.com
==========

Copyright 2011-2012 EURLCLINIQUE Division Culturelle. All Rights Reserved.